

プロローグ

ジャック・ヴァシエは過去を振り返らなかつた。彼は日記もメモも残さなかつた。アンドレ・ブルトン（一八九六—一九六六）は「侮蔑的告白」や『ナジャ』を始めとする幾つもの作品の中でヴァシエについて書き記したが、それらを読むと、まるでヴァシエはブルトンと知り合った瞬間に生まれ、ブルトンが目にし、声を聞いている間だけ存在していたかのようなのである。ブルトンから発せられた「あらゆることに価値をほとんど付与しない」（「侮蔑的告白」より）若き自殺者としてのヴァシエ像は、ダダ・シュルレアリスムの運動内部で共有された後、その外へと拡散していった。そして驚くべきことにそのイメージは、ヴァシエの死後五十年以上経った一九七〇年まで変わることなく続いたのである。『シュルレアリスム宣言・溶ける魚』の中でブルトンは、「ジャック・ヴァシエは私のなかでシュルレアリストである」と書いた。それでは、ブルトンの外においてジャック・ヴァシエとは何者だったのか。彼は本当に自殺したのだろうか。一九七〇年以降、役場や学校や軍隊での公的記録、写真、家族や友人たちの証言、彼らに宛てたヴァシエの数多くの手紙、ヴァシエのデッサンや詩や短篇小説が再発見された。ブルトンによって描かれたヴァシエの横に、今やもう一人のヴァシエが立っている。このヴァシエは、ブルトンによるヴァシエ像を最も近い場所から修正し、同時に補充することのできる存在なのではないだろうか。

また、ヴァシエの再発見とともに、彼が在籍したナント高校（現クレマンソー高校）における、「ミーム」あるいは「サール」と名乗る青年たちからなる文学グループの存在が明らかになった。中心となったのはジャン・サルマン（一八九七—一九七六）、ウジェーヌ・ユブレ（一八九六—一九一六）、ピエール・ビスリエ（一八九六—一九三〇）の三人で、ヴァシエは僅かにその外周にいたように思われる。本書では彼らを「ナント・グループ」、あるいは「サールたち」と呼ぶが、ヴァシエがブルトンに伝えた「h抜きユーモア（unou）」の概念は、サールたちの共有財産をヴァシエが独自に発展させたものである。また、サールたちが行った「一体詩」と呼ばれる詩的実験は、ブルトンとフィリップ・スーポー（一八九七—一九九〇）の自動記述法による『磁場』（一九一九）を先駆ける性質を持っている。サルマンは俳優・劇作家として成功し、日本でも一九二〇年代からその作品が紹介されている³。しかし、第一次世界大戦中に二十歳で戦死したユブレ、戦争は生き延びたものの、モルヒネに溺れ、三十四歳で謎の死を遂げたビスリエの作品については、これまでほとんど顧みられることがなかった。サールたちは自分たちの価値を信じ、あるいは信じたいと願っていた。サールたちが交わした手紙を読むと、一九一四年の第一次世界大戦の間際までいかに努力していたかが分かる。サルマンは友人たちの手紙、原稿、絵、写真、雑誌を、一九七六年に死去するまで大切に保存した。サルマンの死後、娘のジャックリーヌは父親の原稿、蔵書、プライベートな品々とともに、遺品の中にあつた父の友人たちの生の証をナント市の公立図書館に遺贈した。今日、それらはメディアアテック・ジャック・ドゥミの郷土歴史資料室に「サルマン・コレクション」として保管されている。本書の著者は二〇一〇年、二〇一三年、二〇一四年、二〇一七年に同資料室を訪れ、コレクションを閲覧・調査した。

ブルトンとヴァシエは一九一五年末にナントのボカージュ通りの臨時病院で出会った。ブルトンは自分とテオドル・フランケル（一八九六—一九六四）とルイ・アラゴン（一八九七—一九八二）がヴァシエから受け取った十四通の手紙を「ジャック・ヴァシエの戦争の手紙」（以下、『戦争の手紙』と略す）と題してまとめ、一九一九年に『リテラチュール』誌第五号から第七号（七月から九月）にかけて掲載した。さらに、ブルトンは冒頭に一通を加えて十五通と

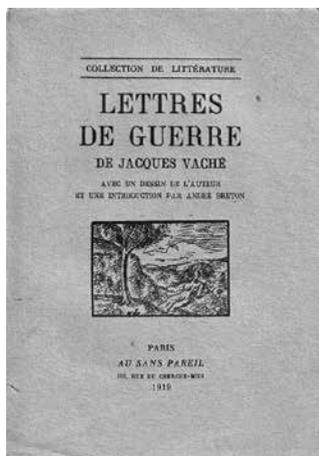


図1 『戦争の手紙』1919年版



図2 『戦争の手紙』1949年版

した『戦争の手紙』を一九一九年にオ・サン・パレイユ社から、一九四九年には四つの序文をつけた改訂版をKエディター社から出版した(図1、図2)。後者の版は一九七〇年にエリック・ロスフェルド社から再出版されている。一九八九年にはジョルジュ・セバグが、この十五通に父親、母親、サルマン、ジャンヌ・デリアンへの手紙を加えた計七十九通を『ジャック・ヴァシエの七十九通の戦争の手紙』として、また一九九一年にはヴァシエがデリアンに送った手紙を『ジャック・ヴァシエの四十三通のジャンヌ・デリアンへの手紙』として、いずれもジャン・ミシエル・プラス社から刊行した。その後、二〇一五年にフィリップ・ピジャールが六十四通のヴァシエの手紙を収めた『軽快な彗星の軌跡の中で——戦争の手紙 一九一五—一九一八』をボワン社から出版し、二〇一八年十二月にはパトリ・ス・アランとトマ・ギュマンが、百五十八通もの手紙、ヴァシエのイラスト、絵画、写真、詳細な註からなる完全版と言える『戦争の手紙 一九一四—一九一八』をガリマール社から刊行した。本書は再発見された資料と全ての手紙を用いて、ヴァシエの生涯を追っていくものである。そうしてヴァシエの内面と彼を取り巻く外的な状況が明らかにされた時、ブルトンによる十五通の『戦争の手紙』は、いざことも知れぬ戦争の空から運ばれてきた託宣ではなくなるだろう。